

## 近代日本文学にあらわれた僧侶像（五）

見 理 文 周

### 十六

近代文学と仏教との係わりを探る一つの手掛かりとして、筆者は先に次のような分類を試みたことがある。

- ① 仏教的史実から生まれた文学
- ② 仏教的教養から生まれた文学
- ③ 仏教思想から生まれた文学
- ④ 仏教的体験から生まれた文学

（「近代日本文学と仏教との接点」——仏教的文学の成立について——、S 47・8 刊『印度学仏教学研究』第二十一巻第一号所収）

ここで、立原正秋（1927～）の作品の中から僧侶の登場するものを取り上げてみると、それらは、この分類の④に該当するばかりではなく、多分に②的な色彩が強く感じられる。しかも、それらの全体に漂う一種の無常感のようなものが、本当に作者の無常観に根差したものであるな

らば、③の分類にも係わりを指摘しなければならないかもしれない。

ところで、立原正秋は武田勝彦氏によれば、「葛藤の中に生と美を調和させようとする志向性」をもち、「中世美への再現へと向かっている」作家だという。（『国文学、解釈と鑑賞』483号、一九三頁）しかし、そのような志向を指摘された『きぬた』（昭47）について考察する前に、その後に発表された自伝的な作品、『冬のかたみに』（昭48・50）について、眺めてみたい。この作品は、作者の分身である主人公の幼少年時体験、それも禅宗（臨済宗）という僧院を生育環境とした人間形成の過程を、僧侶の子としての立場から、つまり寺院生活の内部から描いたものである。それゆえ、これは作家研究の絶好の資料であるばかりではなく、近代日本文学において稀な、異色の作品といえるからである。

そこで次に、この作品の第一章「幼年時代」と第二章「少年時代」に焦点を絞って、主人公である作者と、それを取巻く人々の言動を拾い上げてみることにする。

まず、「私」（重行、僧名は禪文）は、四歳にして無量寺に入り、老師から漢文の素読を受けることになる。朝鮮大邱市在にある臨済の名刹である。しかし、その時すでに母は、『子供までを僧侶にすることはないでしょう』と言って反対する。『僧堂の生活を身につけてどうなさるおつもりですか。わたしもいつまでもこんな淋しい村で暮すのはいやですよ』この母は、重行を黙溪書院というところに通わせることを主張していた。

父は「僧堂なら四書五経のほかに仏教を教われるし、経典を身につけておいてわるいことはない」と答え、「淋しいのなら生家に戻れ」と口調を荒げて、母を黙らせる。それにもかかわらず、「私」が僧堂に入ってから、この母は僧堂の生活はつらくないかと訊き、父への不平を述べる。また魚を獲ると、生臭いからいいかげんにしなさいと言いつつ雨が降ると、僧堂にのぼるのを休みなさいと注意する。「私」は後年、あるとき父を訪ねて来て、その後市場への途中で菓子を出してくれた一人の女性——白麻のチョゴリとチマで軀を包んだ妓生の、「なにか清らかな容」が心に残り、この母よりも懐かしく思いかえすようになる。「この妓生のうつくしき、ものやわらかさ、やさしさ」が、母親には無い決定的なものを「私」に与えたのである。また、たとえ母が「私」が経典を学ぶのを喜ばなくても、「経典は、無量寺の土塀沿いの道と同じく、私が還って行くべき場所」であったし、父が「私」の心の中に次第に強い存在感を増していくのに、母は影のうすい存在であり、母が数日間留守にしても「恋しいと思ったことはなかった」し、次第に「母を距離において

眺め」るようになるのである。「私」にとって母は、子供の目にも「かなり手前勝手な女」だった。

その後、「私」が十歳の時、母は再婚して日本に去る。「私」は叔父が開業している病院にあずけられるが、そこで母が白い胸をひろげて赤ん坊に乳をふくませているのを見て、「なにか見てはならないものを見た気が」する。後年、私はふりかえって、その時の母を美しいとは思えず、「なまぐさい女」で「面倒な女」だったと思う。そんな母には「一片の愛情も持っていなかった」し、「うらみもしなかった」のに、「どうしても赦せない面」があって、「もしかしたら、……母になんらかの意味で自ら滅亡するのを願っていたのかもしれない」かった。

一方、「私」の父の円俊は、李朝貴族の出身で、六歳で無量寺の僧堂に入り、京都の大学で印度哲学を学び、そこを中退して軍人を志望して大邱連隊に入隊。そこに四年間身を置いて後に辞して禅僧となり、無量寺の専門学校（叢林）で『朝鮮仏教史』や『碧巖錄』を講じながら、宗務長もつとめている人であった。そして、無量寺の伽藍の中にある薬師殿に常住して書斎にこもっていることが多く、高麗青磁や李朝白磁を愛していた。彼は、これらの青磁や白磁に酒を入れたり花を挿したりし、学校時代の仲間がくると、それらをお土産として持たせたりした。「私」は、記憶残像としてあとをとどめるそれらの青磁や白磁によって、自分は「類のない幸福な幼年時代を過した」と思っている。にもかかわらず、「一方で限らない無常感に充ちていた」のは、何故だったのか。

若い雲水たちに講義しているときの父は、「ふとい響きのある声」で

活気があったのに、一方「ひどくだるそうな後姿」を、「私」の心に焼きつけているのだった。それは、白麻の若い妓生が無量寺に父を訪ねてきて、矢文を届けてくれと「私」に頼んだ日の記憶である。この父は、めったに怒ることがなく、他人がなにをやっても眺めていた。幼年時代の「私」には、「解らない人」であった。

「私」が六歳の冬、「風も凍るかと思われるほど冷たく晴れわたった日の昼すぎ」に、この父は亡骸となって帰ってくる。自害したのである。その朝、寺男が寢室に伺いに行ったが返事がなく、蒼い顔色をしていたので手をふれたら冷たくなっていて、口から血が出ていたという。

青酸カリによる自裁である。しかし、父の死顔を見て、母も下男も下女も歎いたが、なぜか「私」は涙が出ない。そして、いつか妓生が訪ねてきた時に見た、ひどくだるそうな後姿を思い出し、「本院の東の山門から僧堂にいたる道を視」ながら、そこに「いつも無限のさびしさが充ちてい」るのは何故かを考える。そして翌日の葬儀が終り、「埋葬が終ったとき私はじめて声をあげて歎き」、「父上がいよいよ、父上はどこへ行かれたのだ」と叫ぶのである。

十数年後に、「私」は父の残した「秋雨宿・釈王寺」という題の詩を読み、「仏法を万法の源とみていた父がなぜ自裁しなければならなかったのか」、「面壁九年を超えていたはず」なのに、「それでも行く道が見えなかったのだろうか」と考える。が、さらに後年、韓国の田園と寺院を訪ね歩き、自裁した父の年齢を超えてしまった自分を振りかえったとき、「父の三十四年の短い生涯は無常観によって支えられていた」こ

とを、理解するのである。

父の臨終の偈が、切実に無常感を示していた。「三十余年遊夢宅／少学文武・似空花／幻身影未安寧／一切有為如泡影／今朝脱却帰空無／古仏堂前醒月明／但憶帰円寂不能」。「私」は、父の自裁は臨終の偈に尽きている、と思う。道を求めた父は、「やがて無常にたどりつき、一切有為法が夢幻泡影の如く感じられたとき、円寂に帰さなくともよい、という思いにたちいたったのではないか」。「無常を世の実相として捉えていた」父の死は、だから「自然死と同じ」ではないか、と解釈するのである。

実は、この『冬のかたみに』という小説の「冬」は、この後から始まるのである。つまり、父の自裁と母の再婚という、少年の「私」に訪れた苛酷な運命の後に辿らなければならなかった自立のための試練の時期が、到来するのであり、この「冬」の季節こそは、主人公（つまり作者自身）の強靱な美意識や冷厳な人生凝視の姿勢を造り上げる、人間形成期なのである。すなわち、かつて武田勝彦氏が「立原作品の基調は、死にせよ、離別にせよ、最終段階で冷えた眼で生の担っていた現実を突き離すことにある。このカタルシスに向かって創作の営為が凝集される」（『国文学』498、現代小説辞典、二二八頁）と評したことの大きな要因は、この辺にあると見られる。

しかし、その時期の「私」を眺める前に、无量寺において大きな精神的感化を受けた三人の僧侶の言動について、眺めてみなければならな

い。その一人は老師であり、もう一人は虚白堂清眼、もう一人は雪潭逍遙である。

まず老師は、「私」が父につれられて初めて無量寺に入った時、『…今日からおまえはわたしの子じゃ。わたしの子は仏さまの子じゃ。おまえには梵海禪文という名をあげよう。…』という。そして、とある日、論語の講義途中に言うのである。『あの子もおまえと同じ年頃にこの僧堂にきた』『あの子はずいぶん苦勞をしたが、おまえはあんな苦勞はしない方がよい』と。「あの子」とは「私」の父のことであり、この言葉には父の運命を看通した老師の、透徹した眼が感ぜられる。また後日、「私」の父方の祖父のことを話題にして、『母方の祖父と父方の祖父は友人だ。そして父方の父と私は友人だ。わかるか』と言う。『これは、大きくなったら、自分で理解することだ。そうだ、歴史は、理解するしかない。おまえの父は、無量寺からいちどはぐれて行き、日本の軍人になった。そしてまたこの無量寺に戻ってきた。おまえは、はぐれないように生きていかねばならない。父から両班<sup>ヤンバン</sup>の話をきいたことがあるか』

両班というのは、高麗、李朝時代を支配した貴族階級（文官は東班、武官は西班）であり、「私」の祖父は、この両班として朝鮮の臨濟宗を日本の曹洞宗の侵略から守り、無量寺の領地を守った人であるから、「私」（禪文）はこの貴族の血を誇るべきだ、と老師は論じたのであった。その後の「私」は、一度も自分の貴族の血を誇りに思ったことがなかったし、出来ることならそこを避けて通りたかったのだが、叔父の話

によれば、もっともよく「性剛だった祖父の一面」を享けついたのは、他ならぬ「私」なのであった。

無用松溪と称するこの老師は、「没落した貴族の生家を捨て、いろいろ名利を求めず、無量寺に入ってから生涯山を降りたことがない」僧侶で、自分では作らないが古人の詩文を愛し、とくに詩人陶淵明の影響を受けて、「人間の生死を自然現象の一部として捉え」る考え方をとっていた。そのため「私」は後年、陶淵明を愛して李朝時代の古書を探すようになるが、それは「私の幼年時代に影響をあたえ、私の今日をつくってくれた老師を知るためだった」と、述懐している。また「私」の父方の祖父とは親友であっても、祖父とは別な人生を歩み、「無量寺で現世の虚しさを見極めた人」が老師であり、虚白堂清眼によれば、「無用者に徹した生涯」であったという。

父の葬儀の日、この老師はひとり本堂で読経をしており、「わたしは竟にあの子が行く道をさがしてやれなかった」と言う。幼年時代の「私」には、そんな老師は大きすぎて解らない存在であった。が、後年ふりかえてみて、父から学んだものは美であり、老師から学んだものは「寛容」であった、と思う。また「私」は、「いろいろに解釈できるから憶えておけ」と言って教えられた、一つの公案を思い出す。現世の無常を説いたこの禪語の一節が、その後の「生きる支え」となったのである。それは、「大夫、時の人、此の一株の花を見ること夢の如くに相似たり」というのであった。

さらに「私」が、二年後に日本の伯母に引き取られることになり、無

量寺を訪れた学期末の一夜、老師は部屋にはいると『文や、ここにすわれ』と言って筆を渡し、次の偈を書かせる。「界有<sub>レ</sub>成壞空<sub>レ</sub>念有<sub>レ</sub>生住異滅<sub>レ</sub>身有<sub>レ</sub>生老病死<sub>レ</sub>凡有<sub>レ</sub>始必終物之常也。」

さらに、また筆をとらせ、次のようにも書いてみるという。「昨日開花今日空枝。人生變滅亦如<sub>レ</sub>是。」そして、『よく書けた。それを持って明日僧堂からおりて行け』と言ったのである。『それはともに昔の禪師がのこしてくれた言葉だ。これから中学に進み、大学で勉強し、それから僧堂に戻ってくるのもよからう』

あくる朝、坐禪と父の墓への焼香と朝食が終わってから、老師は開山祖堂の石碑まで見送ってくれる。そして、礼を言って三拝した「私」にこう言っ、踵を返す。

『文や、去れ』

次に虚白堂清眼を、「武人のような禪僧であった」と、「私」は回顧する。具体的な役職はどこにも記されていないが、無量寺において老師の信任篤く、雲水達の教育の総責任者の立場にあった僧侶だと理解される。声が大きく、禪僧らしい潔癖さをもった人で、「私」はこの僧からは「倫理」を学んだと述懐している。「あの人はいつも拔身をそばにおいて生きていた禪僧だった」と。

この清眼は、開山祖堂の暗い床の上で絡みあっていた二人の雲水を棒で打ち、一晚雨の中に坐らせ、赦せないかという老師の言葉を容れずに、寺から追放する。そして現場を目撃しても口外しなかった「私」

に、「密告はいちばんよくないことだ」と諭す。また、よく坐禪を「私」に組ませ、大雄殿や遷化堂や梵鐘楼ばかりではなく、百日紅の幹の上でも「工夫して組んでみる」と言う。

また清眼は、「雨がふったあくる朝は必ず私をつれて山に入り、松茸や椎茸の穫りかたを教えてください。茸の出る場所や毒茸の判別法、茸にあたって死んだ雲水のことなどを話し、その茸を「私」の父に届けさせたりもする。

「冬の僧堂生活は子供には無理だ」と母は言ったが、その冬になって払曉、「私」が雲水達と顔を洗っていると、『どうだ、つらいか』と清眼はきく。清眼は朝になると「私」を起こしにき、次第に老師にかわって懸命に教えるようになる。「おまえはやがては無量寺を継ぐ身だ」と言い、そのときの処方箋を、次の偈などを示して、幾日もかけて教えてくれるのである。「飛星爆竹機鋒峻／裂<sub>レ</sub>石崩<sub>レ</sub>崖氣象高／對<sub>レ</sub>人殺活如<sub>レ</sub>王劍／凜々威風滿<sub>二</sub>五湖<sub>一</sub>」。「このような一面をそなえながら、またつぎのような者にもならなければいけない」と言っ、次のような偈も。

「浮雲来無処／去也亦無蹤／細看雲来去／只是一虚空」

ある日、所用があつて清眼が自坊に帰ることになったとき、「私」は村端れまで見送つて、十日ほどしたら帰ってくるとは聞くが、本当に帰ってくるのかどうか不安になる。「私」にとって清眼は、もはや必要欠くべからざる存在になってしまっているのだった。そして、それだけに清眼が無量寺に帰って来たときの喜びは大きく、久しぶりに、その太い声をきいて「私」は喜ぶ。『きちんと勉強にはげんだか』と訊く清眼

は、その母を失って葬儀をすませてきたのだった。彼は「私」に明後日また僧堂に昇ることを促し、『母上によろしく』と言う。その、すたすたと山に歩き去る後姿を見送って「私」は、急に愛惜の情がこみ上げ

る。後年、「私」はしばしば、「清眼が私にあたえてくれたものがなんであったか」を考え、「それは卑劣なもの、醜いものに対する容赦のない視線ではなかったか」と思う。幼年の眼には、父も老師も解らない存在だったが、「清眼はまっすぐ私のなかに響いてきた」し、「殊に寺領の四季の移りかわりの美しさ、遍在している自然のたしさを教えてくれた」ことを痛感するのである。

しかし、この清眼が与えてくれたものは、単なる厳しさの押しつけだけではなかった。たとえば、手袋や靴下の使用を禁止したが、それを頭ごなしに叱りつけるのではなしに、「私」が隠しておいた場所から靴下をひそかに取上げてしまい、それを「私」が質問すると、『私はおまえが靴下を穿いているのを見たことがないが』と、禅問答式にとぼけながら、それを教えるのだった。そして何気なさそうにして、作っていた餅を呉れたりした。

また後に、公案をいくつも与えてその答えを求めることもあったが、一緒に田園を歩いていて、そこで出会った蛇を鋏で両断して、△趙州録▽にある「南泉斬猫」の話を、無言の禅問答として教えたこともあった。

いつか父が死んで埋葬が終り、「私」が父がいまいやと叫び敵い<sup>な</sup>たとき、『父上はそこにおられる。おまえがないているのを見ておられ

る。思いつきなけ』と言ったのも、清眼であった。清眼の存在は、老師とともに、「私の裡にぬきがたい影響をあたえて」おり、僧堂での寒さや冷たさなどは単なる「皮膚感覚の問題にすぎない」のだった。それは、いつも温かく老師と清眼の視線が、「私」に注がれているのを感じていたからである。

「私」は、清眼から出されていた公案、『出と未出のとき如何』の答えを、次のように答えて、禅の世界に恵まれていることと、老師と清眼の恩愛に感謝する。『眼花する莫れ。蓮花自らに任せよ』

そして「私」が、少年時代の厳しい「冬」を通り過ぎて、やがて日本の伯母のところに行くために無量寺を訪れ、老師と清眼とに別れることになったとき、清眼は、かつて「私」が彼を見送った村の端れまで見送ってくれ、泪をこらえる私に問答するのである。

『禅文！』『汝、寒暑到来を如何に回避するや』  
泪も引っこむ思いで「私」は答える。『われ、無寒暑の処に向って去らん』

清眼は続けて問う。『いかなるか是れ無寒暑の処』

「私」は答える。『寒の時は己を寒殺せん』

『暑はいかに』

『己を熱殺せん』

『よし、行け』

凍った風が、褐色に枯れた野を吹抜ける道を、「私」は泪を流しながら、後に戻りたい思いに耐えて歩く。清眼は、さようならという「私」

に返事をせず、「仁王のように起つてい」た。

「私」の人間形成にかかわりをもった僧侶の三人目は、雪潭逍遙師という。無量寺の末寺の白羊寺の僧で、父の自裁によって無量寺を降りることになったとき、老師が「町にいるあいだは白羊寺の雪潭逍遙師について学ぶがよい」と言われたのである。白羊寺は、寺僧が二人いるだけの小さな寺であるが、中台山の麓にあつて溪流にのぞみ、「そこに自分を預けることができ」、後年、悩みを抱きながらそこを「おもいうかべるだけで慰めになった」寺院である。「私は」、この師から「四書五経」や「臨濟録」や「碧巖録」を学ぶ。雪潭師は、「一巻の書の順を追うことをせず、私がおみこみやすい節から教えてくれ」る。

この雪潭師は、老師よりは若い、豪放磊落な性格で、「居天下之広居、立天下之正位、行天下之大道。得志与民由之、不得志独行其道。富贵不能淫、貧賤不能移、威武不能屈。此之謂大丈夫」といった文を朗読させ、その後に解釈してくれる。「私」が後に、二十歳をすぎてから「無門関」を読んでもさしたる感興をおこさなかったのは、このようにして少年時代に「臨濟録」と「碧巖録」を学んだので、「禪と儒がたがいを制しながら平衡を保って」身につけていたからだだった。そして、しらすしらすのうちに「私」の中を領し、そこに残してくれた臨濟の家風の大きさが回顧されるとともに、それにもかかわらず禪の世界でよく見られる「奇抜な言動」に走らなかつたのは、学んだ「四書五経」の精神のせいであつたことを意識する。また「私」は、老師と虚白堂清

眼が自分の基礎をつくってくれ、「雪潭師はそれを敷衍してくれた禪僧であつた」と当時を振りかえり、その豪放磊落な性格が、「籠りがちな私の心をやわらげてくれた」と思うのである。――

なお、この作品には、以上の三人のほかにも二、三の僧侶が登場するが、「私」が影響を受けた僧侶として、祇林寺の住職の石門了覚と、そこに居る閻堂常宗という若い僧侶のことも記している。とくに常宗については、無量寺の雲水達がみな「仏に逢えば仏を殺し祖に逢えば祖を殺す」を実践する気魄にみちた生活をしていたのに、「そんな世界から実に遠いところにいる」「心のやさしい青年僧」で、石門師の留守中にしばしば語録のわからない箇所について教えてくれたと、料理が上手でよく一緒に食事をした思い出なども混えて、記している。

ところで、「私」――すなち作者の立原正秋氏は、四歳で僧堂に入り、六歳で父の自裁に遭い、九歳で母に去られ、叔父に引取られ、十一歳で日本の伯母のところに来るといふ経験をし、さらに、日韓混血児としての苦悩とも幾度か対決している。そして、とくに父亡きあととは、「目前にたちはだかる者があれば突きとばして」通り、「対象をひややかに眺める視線」をもつようになる。しかし、ただそれだけではなかつた。そのような「ひやかな視線の裏には、いつも、土堀沿いの道が、まるで伴侶のように私につきそっていた」のだ。そこは、「無限のさびしさが充ちているが、しかしいちばん安堵できる場所」であり、いわば作者の原風景であり、自己形成空間であつたのである。また、「類のな

い幸福な幼年時代」でありながらも一方に充ちていたという「限らない無常感」こそは、「私」の原体験であり、「まるで一陣の風のように通り抜け」「どんな時にも真直に伸びた樹木のように屹然として屈するところがない」驚嘆するほど「無類の強靱さ」（文春文庫『きぬた』、入江隆則氏の解説）という作者の性格が形成される、基盤であったと思われる。そして、この作品で作者が書こうとしている「冬」の生活は、この基盤のゆえに可能であり、精神の試練期としての大きな意味をもち得たのであろう。

当然のことながら、「私」が幼くして無常の思いに捉えられ、「子供らしい遊びの世界から遠ざかりだした」のは、父の自裁以降である。無量寺の僧堂の頃に見た「父のだるそうな後姿」と、「自裁したときの父の土色の顔」が、いつも重なっている心の中に残り、その体験はその後の「私」に、「生きて行くことにたいして制限と断念をもたらす」。もはや、「村の子達と小川で魚を獲り、桑の実を挽ぎ、蝗をつかまえ、氷すべりをして遊ぶ」ことはなくなる。しかし、決して陰気な子ではなくて、あきらかに「臨済の家風」によって「私」の生は促されていた。

「私」は、父の死んだ年の冬も無量寺にとどまって母のところに帰らずに僧堂の生活を続け、その後町に移ってから、休暇になると無量寺に登って僧堂で暮す生活を繰返す。母が、「おまえはまったく変な子だ、坊さんになっても将来いいことはない」などと言って牽制しても、それを無視して寺に登る。寺に向いながら、「町に戻ってこなくともよい」と思い、寺で溪流の音を耳にしながら睡りにつくことで安らぎをお

ぼえ、「ここでの生活が本来のもので、町での生活はかりものではないか」と考える。「私」には次第に、「母を恃<sup>た</sup>みにせず己を怙<sup>た</sup>む精神が芽ばえていた」のだった。そのために、母方の祖母の死にも行かず、後で「これから無量寺に行くのはやめなさい」と母を怒らせる。しかし「私」の心は、虚白堂清眼の話によって占められていたのだ。「おまえの出発点は閒居先生（私の父）が自裁した時点だ、どうやって父を超えるかがこれからのおまえの問題点だ、幼時に肉親の死顔をみるのは一度でたくさんだろう、人間の生死は自然現象だから、これからは肉親の死に煩わされるな。」

また「私」は、「ときどき川をみに行く」。川を眺めていると、無常の思いが深まりもしたが、川を前にしていると「安堵」があったのである。そして、その流れをさかのぼって行けば、無量寺の僧堂に行けるといふ、「なぐさめ」もあるのだった。

このようにして「私」は、自分の伴侶のように、無量寺に愛着する。たとえ、若く幼い身には苛酷な「冬」の生活は辛くても、「無量寺を正確に心に刻みこ」むことによって、老師と清眼と周囲の豊かな自然の存在によって、「生きて行けた」のである。心には無常感が充ちていても、「かつてそこで彼の父が生活していたことをおもいかえす」ことで慰めが得られ、「無常が世の実相であることを、私は誰にも教えられずに、体験から、日日の生活から学んでいった」のだった。

「私」は、その後、叔父の都合で、たった一人だけの生活を余儀なくされ、孤独な生活の中で高熱を発して苦しむ生活も経験するのだが、



「あのとき私にはなにか希望があったのだろうか」と、当時を回顧している。「なんと孤独だったことだろう。あの風も凍るような冬をどうやってすごしてきたのか、いまから考えると不思議である」。

わずか十歳の少年が、たった一人で暮らし、あまつさえ四十日間もの間、アスピリンばかりのみつづけていたという「冬」の生活。それなのに、「このとしの冬が私にはいちばんつかしい」のである。「私」は、この冬を経験したことによって、母に再会しても、なんの感動もない。「母も弟も異母妹も、私には単なる人間にすぎ」ず、この「冬」を通りこしたことによって、「肉親の絆の感情」は、心の中で「はっきり断たれ」たのである。つまり、「寒の時は己を寒殺」し、「暑の時は己を熱殺」するという、禅の脱落がなされたのである。

## 十七

『冬のかたみに』の第三章、「建覚寺山門前」の内容は、時間的には大分飛躍して、第二章の終りから十年も過ぎた敗戦二年後の頃に設定されている。「私」は私大の文学部の学生で、すでに妻帯しており、臨済宗建覚寺の山門前に居をかまえている。横須賀線の北鎌倉駅の近くであるが、それは建覚寺が無量寺の三分の一しかない規模ではあっても、「禅寺らしいその簡素なたたずまい」に心魅かれたからであった。僧堂の門の「提唱碧巖録建覚寺僧堂」の文字板が、无量寺開山祖堂のそれを想起させ、「還れる場所」としての安堵感を与えたのである。

なお、「私」が昭和十九年に訪ねたとき、无量寺では無用松溪老師はすでに亡く、祇林寺の石門了覚師が老師の座に代り、虚白堂清眼が宗務長になっていた。白羊寺の雪潭道遙師も故人である。

「私」は、円寂に帰した老師や雪潭道遙師たちの往時を想い、「あらためて私に影響をあたえてくれたこれら禅僧達の厳しさの裏にあった心のあたたかさ」に感動する。そして、「无量寺に還るべきか、……日本の古典の世界にとどまるべきか」の岐路に立ち、敗戦になって後者の道を選らんでも、「迷い」はまだ解決されていないのである。

この章の初めのところに、そうした心境を象徴するような描写が出ている。建覚寺の居士林に入って春の坐禅接心をやろうとしたときに、先に入っていた井田という医師との間に交えた、△無門関▽についての話である。

「大道無門／千差有路／透得此関／乾坤独歩」

「……大きな道に入る門は無い、と解釈するより、大きな道には入る門が無い、と解釈した方がよいと思います……」

そして、ある朝のこと、僧堂の雲水頭の朴中碩林という僧侶から禅問答をかけられる。

『三身』——△從容録▽にある公案であったので、「私」はその通りに答える。しかし、『作麼生』と催促されたとき、問をおいて答えたのである。『大道無門／千差路有り』

このことが切っ掛けとなって、「私」と朴中碩林とのつきあいが始まる。そして、昭和四十三年に寂するまで、「もっとも禅僧の原形をとど

めていた人」で「石門了覚師と虚白堂清眼をあわせて二つに割ったような人」として、彼に師事することになる。かつて、「私」は虚白堂清眼によって「卑劣なもの醜いものに対する容赦のない視線」を教えらたが、そのような間然するところのない立派な禅僧として、今、この碩林に邂逅したのであった。「還るすべのない無量寺の世界の一端を、建覺寺と碩林と彼の寺に視ていたのかもしれない」と、「私」は思う。

作者は第二章のあるところで、「禅僧の条件は才ではなく性であった」と述べているが、第三章の文中にも、「禅は解釈ではなく会得であった」と書いている。実参者の実感であろう。だから、井田という男が他人の参禅の姿勢について話しかけても、『そうですか』と受け流すだけである。「自分を示す必要もなかったし」、他人の「生禅」<sup>なまぜん</sup>を指摘する必要もなかったのである。そして、「私」が先日問答で『われ常にここにおいて切なり』と答えた言葉は、碩林が言うように、「実践してきた者でなければ応じられない答」であり、「頭から出てくる言葉ではない」かったのかもしれない。いや、それは事実であり、「幼年時代に父の自裁にあい、少年時代に母に去られてからというものの、私はいつも生きるのに切だった」のである。「私」は母と別れたときに潜るべき門がなかった。無量寺に別れを告げた時も同様だったが、引きかえす道はなく、どこかに門をみつめて潜らなければならなかった。つまり、「切」であった。そして、いつか、どこかで、△無門関▽を透得して、通りすぎていた。碩林も、そのところを次のように言うのである。『いまの

日本の禅宗の寺は、どの寺でもそうですが、子弟に大学教育を終えさせてから僧堂に送りこんでくる。したがって実践より理論がさきに頭のないに詰まってしまう。言句に滞って解会<sup>げえ</sup>を覓<sup>もと</sup>むるをや、棒を掉<sup>ふる</sup>って月を打つ、と同じで、幼少年時代に実践してきた者とのちがいがはつきりしているわけです』

こう語る碩林という禅僧との出会いは、「私」にとって「大きな喜び」となる。「……あの人は、たしかな禅僧だ。俺にとって、妻とは、ともに歩ける存在だ。友人とはなにか。これは、ともに語れる存在だ。ところが、あの禅僧とは、ともに歩けるしともに語れる。……」と妻に語る。語録にある「眼を眈<sup>またたくま</sup>得し来らば早くすでに蹉<sup>しゃ</sup>過<sup>か</sup>せん」の一節のように、うっかりするとすれちがっていたかもしれない碩林を見出した喜びは、自分が碩林に見出された喜びよりも大きかった。「裏に向いても外に向いても、逢着せば便ち殺せ。仏に逢っては仏を殺し、祖に逢っては祖を殺し、羅漢に逢っては羅漢を殺し、父母に逢っては父母を殺し、親眷に逢っては親眷を殺してはじめて解脱を得。物と拘わらず脱透自在なり。」一切の束縛からの自在を説くこの臨済の家風を、かつて幼少年時代の「私」は老師や清眼から受けており、そこだけが、「私が安堵して還れる場所」だった。「私」の脳裏には、かつて老師が「文や、去れ」と言い、清眼が「よし、行け」と言った時のことが甦<sup>よみがえ</sup>る。

「私」は、妻のお産と教授の奨めによる△方丈記▽と△徒然草▽の受験参考書書きという生活の合間をみて、朴中碩林とのつき合いを進める。

建覺寺の景芳庵に酒を持って訪ねると、いきなり、『如何なるかこれ  
学人用心の処』と禪問答をしかけてきて、答えられなければ帰れ、とい  
う目をする。『師の一問の遅きこと奇怪なり』と「私」は答えて、抜け  
て通る。碩林は、笑いながら、「五月は沼津にいるから遊びにきなさ  
い」と言つて、愛鷹山の麓にある自坊に来ることをすすめる。

その明窓寺は沼津郊外の西沢田にあり、バスを降りてから寺まで二十  
分ほど、両側に雑木林のつづく緩やかな坂道を登る。登りつめたところ  
に建つ山門の造りが、「無量寺のそれとまったく同じ」である。

庫裡の裏山を登つて畑に出ると、白い馬鈴薯の花のいちめんに広がる  
向うに、「紺の股引に白いシャツ、それに麦藁帽子をかぶった男が肥柄  
杓で肥をやつて」おり、それが碩林だった。「私」が「手伝いましよ  
う」と声をかけると、『おや、来ましたか。もうおしまいです』と言ひ、  
どこから境内に入ってきたかと訊く。『東門あり西門あり南門あり北門  
あり、……』と答えると、碩林は笑い声をあげ、「さあ戻りましょう」  
と畑を出てきて肥桶を担う。その後につきながら「私」が、『坐仏せば  
即ち是れ殺仏、の境地に達せられたのはいつ頃だったのでしょうか』と  
きくと、『すべては殺人刀活人剣です。自分を殺すも活かすも、それだ  
けです。』と答えて言う。『きみはいまどうですか』。そして、「私」が  
『求むべき仏陀もなく舍つべき自己もなき境界に達したいのですが……』  
と言うと、居士林の他の参禅者の独善的な態度や無自覚な姿勢など  
について、淡々とした口調で語るのである。

「私」は、碩林の老母が出してくれた山独活の酢味噌和え、蕨の胡麻

和え、繶の木の芽の胡麻油炒め、里芋の煮っころがし、乾した芋茎の味  
噌汁、木綿豆腐の煮つけ、などと禪寺風の精進料理に、無量寺僧堂に還  
つたような気分になる。碩林が、『剣はどこまでやったのですか』と訊  
くので、死漢を斬らずまではとても、と答えると、『白骨山に連る剣も  
あるが、しかし鈍を嫌う剣の方がよいことはわかつている。それが出来  
ないのが人間です。匣を出でるときは寒光斗牛を射、匣から出たとき  
は、千軍は得やすく一将は求め難し、そんな剣を身につけてください』  
と説く。そんな碩林の言葉をききながら、「私」は「あらためて彼の心  
のあたたかさを感じ」る。

翌朝、「私」が鐘の音に目をさまし、心経をあげて庫裡に行くと、す  
でに碩林は笥を掘りに行つておらず、老母が碩林の身の上について話し  
てくれる。それを要約すれば、次のようである。

碩林は前後二回、六年間軍隊生活をしている。最初は昭和十二年の秋  
で、三十歳。すでに二十八歳のとき貰った五歳したの妻と、数えて二歳  
の娘がいた。しかし、十五年の冬に還つたとき、妻はもう寺にはいな  
かつた。彼女は沼津の商家である生家にしばしば戻っているうちに、他の  
男といい仲になり、碩林が帰還する三ヵ月前、生家に五歳になった娘を  
預けたまま駆落ちしたのだった。相手は、長岡温泉で旅館の番頭をして  
いる四十代半ばの男であるが、その後の二人の行方は不明だという。そ  
して、昭和十八年に父が世を去つた翌年、碩林は再び召集されて二十年  
の夏に寺に還つたが、生家に置きざりにした彼の娘は、商家の子として  
育てられ、去つた妻の兄の籍に入ってしまったので、寺とは縁がすつか

り切れてしまった、と。『あの子には寒い冬だったろうと思います。しかしあの子はなにもいわず、またもとの禅僧にかえり、建覺寺とここを往還していました。……』と老母は語るのだ。「私」が再婚について訊

くと、『戦後になってからそんな話はなんだかありました。でも、あの子は、なにを視てしまったのか、その話には応じませんでした』

「私」は、これを聞いて、碩林に「ひとつの山脈のようなもの」を視る。二歳のときに別れて、すぐ近くにいるのに娘に会わない一人の禅僧の心情を、「生滅無常を觀ずるのもまた菩提心」としか理解できない。

「常住ならずして遷流転變窮りないのが世の実相であるとしたら、無相の自己を自覺するいがいに生きられる道はな」く、「無相はすぐ目前にあるのに、私はそれを捉えることが出来な」い。「捉えるちからがな」いのだ。

碩林が掘った筈を土産に貰って妻のもとに帰った「私」は、やがて父親になる自分のことを考える。かつて読んだことのある「曹山寂禪師に僧問う」の一則が心にうかぶ。『如何なるか是れ父子の恩』『刀斧斫れども開けず』——刀や斧で断ちきっても親子はきれないのか？ 臨済は「逢著せば便ち殺せ」と教え、「内外身心を一切俱に捨し、なお虚空の如く取著するところなく」と、黄檗は説いている。「妻をもらい、子をうませ、なおそこで捨てられるか」。「私」は、母とはきれてしまっていたが、父からは脱しきれないのだ。黄檗は、「大捨如<sup>ち</sup>火燭在<sup>ち</sup>前、更無<sup>ち</sup>迷悟……小捨如<sup>ち</sup>火燭在<sup>ち</sup>後、不見<sup>ち</sup>坑穽。」と説くのに、「私」は小捨の境地にすら至っていない。もしも「私」がこの捨をとるならば、「き

れている母に無縁の慈悲を感じねばならな」いのだ。

「私」は、妻のお産に立会い、妻をいたわり、「妻と子のために生きなければ」と思う。今まで「父の臨終の偈にさそわれて死を考えたことがな」んどかあり、「遅晩中間、便ち無常に帰せん」という禅の語録に、死をさそわれたこともあった。しかし、この日の夜、「私」は昼間見た出産の模様をおもいかえして詩を作り、「妻と子のために生きなければならな」と思う。

その翌日、「私」は奈良に行く。そして、薬師寺にむかって土塀沿いの道を行きながら四辻まで歩いたとき、目前を歩いて行く父の後姿を視る。予想外のことであったが、父は真昼の陽ざしのなかを、足もとをみて歩いていて、やがて消えていく。その後姿は、「おまえは生きろ」「自在の人になれ」と、言っていたように思われるのである。

また、法起寺の塔がみえがくれる道端に腰をおろして握飯をたべながら、あの碩林の、人間としての苦しみと、その後の「捨の境地」について考える。碩林も無量寺の禅僧たちも、厳しさの裏に無限のあたたかさをもっていた、と思う。すると、臨済の語録の一節が思い出される。「大道は同を絶し、西東に向うに任す」——絶対の道に方向はない、東に行こうが西に行こうが勝手だ、ということの意味が、「私」にはやっと解りかけてくるのである。つまり、「しばらくは古典の世界に沈潜」して、師は戴かずに、今までどおり「孤独を伴侶にして歩いて」行こうと思う。そのために、その後に碩林を訪ねたときには、所蔵していた梵魚

寺版の禪録集八禅門撮要Vを碩林に進呈して、『還俗した者の手もとにおくより、禅僧のところにおいた方がよいでしょう。……』と言う。

また、その後、碩林に招かれて藁麦を馳走になりながら、「一身は雲水のごとく悠悠として去来に任す」という豊干ふかんの語録の一節を思いかえす。この境界こそは、去来に任せながら確実にある重さを背負って歩いている碩林の現在に、「そのままあてはまる表現」だった。

この作品の最後は、「私」の母の死でしめくられている。沼津郊外の碩林の寺に滞在した「私」が、言葉に余分なものない、いかにも禅僧の母らしい碩林の老母の日常に感動し、その「举措の正確」さに対置して自分の生母を見、「私」なりの引導を渡すのである。すなわち、死にちかい病床を訪れた「私」は「あなたにはいろいろ済まないことをした」といって泣く母に訊く。『父の亡骸がかえってきた寒い日を憶えていらっしやいますか。……あなたはかつては禅僧の妻だった。いまあなたはそこに還っています。きびしさを堅持していた当時に戻ったのです。……』母は、死が見えると答え、『……あのひとに死にわかれてから、わたしは、つまらない女になっていったのです。……（当時に）戻れたのでしょうか』と、ほっとした目をする。そこで、強い言葉で「私」は言うのである。『そうです、戻れたのです。ですからご自分の死がみえるのです。まもなく閑居円俊のもとに行けるのです。これは私が保障しましょう』

やがて、「私」は死んだ母の足に足袋と草鞋を履かせ、無量寺僧堂の

女人禁制の石碑の前で道に迷わぬように、般若心経を読む。その母は、再婚した連れあいのはいった臨済の寺に埋葬される。

その後も、「私」はまた碩林を建覺寺にたずね、一緒に酒を飲んだり、剣道をしたりして、俗人でありながら禅僧とのつきあいが続けられるのであるが、居士林には依然として煩惱を捨てきれない医師の井田のごとき者がいて、俗界に還りながらも臨済の家風を身につけている「私」に、足許を見透かされたりしている。

ともあれ、「私」の行く道はきまったのであった。「自在になれ」「おまえは生きろ」という父の言葉のとおり、たとえ「この世の現象に恒常性がなく、すべてが空であるにしても」、「あの小さな存在」を見守って生きて行かなければならないのである。「小さな存在」——それは言うまでもなく、「私」の妻と、生まれたばかりの子（父の円俊の一字をとった俊たかし）である。その「小さな存在」は今、建覺寺の境内から、「日傘をさして乳母車をおして歩いて」来るところであった。

「私」はその時、八証道歌Vの一節をおもい出す。「一月は普あまねく一切の水に現じ／一切の水月は一月に撰あやまる」

「私」は、これを読んで「目を洗われた思い」になる。

以上、この作品に登場する数人の僧侶について、その言動を眺めてみたが、共通して言えることは、そのいずれの人物も純正なる臨済の禅僧として描かれているということである。この僧侶たちは、仏教の教義も僧堂の生活も本来そこに無理なく当然あるべきものとして、疑いなく受

けとめ、そこに己れを委ね<sup>ゆだね</sup>、その勤めを自らに課している。したがって、生活上の矛盾も問題もなく、組織機構についての告発も、他人への批判も策謀もない。このことは、従来の僧侶の登場する文学作品とは著しく異なる特徴と言わなければならないだろう。無量寺の老師も、虚白堂清眼も、石門了覚師も、闍堂常宗も、雪潭道遙師も、そして朴中碩林も、みな少しも俗気のない、ただ仏道一筋に打込んで精進を重ねている立派な禅僧ばかりである。したがって、その言動は明快で颯爽としており、従来の寺院を背景にした作品に見られた陰鬱さとか、淫猥さとか、俗臭とか、不道德性とか、曖昧さなどは全く感じられない。禅の修業一筋に専念する僧堂の人たちの、端正な生き方が読む者の胸に伝わってきて、自己克己の道を歩む者として、高められていくような心境にさせられるのである。これは、一つには、作品中にふんだんに引用されている禅の語録の偈や公案のせいであるかもしれない。が、何よりも作者自身が臨済の家風の中で生育して、自分の皮肉骨髓に吸収し、同化してしまっただけの気風を、主人公である「私」の眼で語らせているからであろう。

その点で「私」は、還俗した文学者ではありながらも、禅僧としての修業と学識を積重ねた禅僧と少しも変りはない。しかも、その悲痛な運命の試練をあわせ考えれば、常人の容易にめぐりあえない貴重な宗教体験や、人生の苦難を経ているとも言える。それは、文中でくりかえし述べられている「無常感」という言葉によっても、知られる。しかも、作者はこの作品の跋文において、「すでに成人した子を二人もつ主人公にしてはじめて、あるいはやっと、彼は父を殺し母を殺し得たのであつ

た」と述懐しているから、その心境は八捨<sup>はつしつ</sup>の境涯に達して、「無常観」に立っているのだろう。したがって、この作品は、この論述の冒章に記したように、筆者の分類による②にも③にも、そして④にも係わるものと指摘してよいものに思われる。

ところで一方、この作品には多くの僧侶が登場したが、肝心の主人公の「私」は、禅僧らしい過去と資質とをもちながらも結局は、僧侶にならなかった。第二章と第三章との間に時間的な飛躍があるので、その間の事情については詳らかに知ることは出来ないが、「私」は最も安堵できる場所であった寺には戻らずに、「文学」の道を選んだのである。そこで問題になるのは、もはや、なぜ文学を選んだのかではなくて、今後その「文学」がどのように「仏教」に係わるか、であろう。すなわち、筆者が研究テーマとする「文学と仏教との係わり」という命題である。

幸いなるかな、作者の立原正秋氏は、前に挙げた作品『きぬた』（昭和47）において、正しくこの命題に真正面から取り組み、本来禅僧として生きるべき男が、小説家として暮らし、禅院に妻子を残しながらマンションで俗情に身を委ねる日常を、描写しているのである。一体、この作品の意図するところは何なのであろう。そして読者は、いかなる僧侶像として、この主人公を受けとめ、理解すればよいのだろうか。立原作品の秘密や真価を解明する方法と鍵の一つが、この点にあることは疑いのないところである。（未完）

註 使用作品と引用文は、新潮社（昭和50年7月）版の『冬のかたみ』に拠った。